

日野家と将軍家



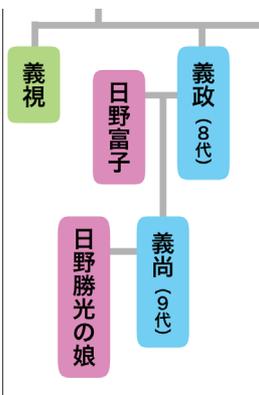
足利義政像・木像（等持院蔵）



日野富子像（宝鏡寺蔵）



九代将軍・義尚（八代将軍義政と正室・日野富子との実子）は
余りにも大きな期待を背負っていた！



足利義尚像・部分
狩野正信（地蔵院蔵）



足利義尚像・木像（等持院蔵）
ウイキペディア（宇治主水）

電子版市民プレス 日野家と将軍家

タブレット地域紙「市民プレス」の電子版として編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

目次

- PAGE 4 日野家は名家だった - PAGE 5 南北朝から室町時代へ
- PAGE 6 日野賢俊 時光は日野家十九代を継ぐ - PAGE 7 日野・裏松家系図
- PAGE 8 時光の子は裏松家へ - PAGE 9 将軍家の系図
- PAGE 10 裏松家(分家)の創始は・・・ - PAGE 14 義資は殺害される・・・
- PAGE 16 日野重子 日野／裏松重政 - PAGE 18 日野家二十一代当主は・・・
- PAGE 18 日野流は将軍家に抑圧される - PAGE 19 日野家二十二代は家秀に
- PAGE 22 義政の室となった富子は - PAGE 23 富子は経済的に力を得て
- PAGE 26 応仁の乱後には - PAGE 28 勝光死後の日野家は・・・
- PAGE 29 付録 醍醐寺「文化財アーカイブス」より

日野家は名家だった

日野家は藤原氏北家の流れで、名家の家格をもっている。奈良時代から平安時代初期にかけての公卿、藤原内麻呂は北家の嫡流となり、その曾孫の家宗が、弘仁十三年(832)、伝承地だった山城国宇治郡日野(京都市伏見区)に寺を創建したことから、名字を日野と名乗ったと伝えられる。

承安三年(1173)に生まれた浄土真宗開祖の親鸞は、この一族、有範の子といわれている。

鎌倉時代には・・・

17代・日野俊光

日野家は、代々儒道(儒学または儒教の道)および歌道をもつて朝廷に仕えた。鎌倉時代、伏見天皇に重用された十七代の当主・俊光は、正和六年(文保元年)(1317)、権大納言(「権官」≡定員外の官職)の大納言≡官職の一つ、訓読みは「おほいものまうすのつかさ」)にまで昇任されて、日野家の地位を確立した。

南北朝から室町時代へ・・・

18代・日野資名（俊光の長男）

俊光の子として知られるのは、資名、資朝、資明、賢俊僧正ほかで、十八代を継いだ資名は弘安九年（1286）の生まれ、鎌倉幕府が擁立した持明院統の光厳天皇に重用され、正二位・権大納言となる。後醍醐方についた足利尊氏が六波羅探題を攻めた折りには、光厳天皇を奉じて京都を脱出して出家した。のちに尊氏が後醍醐天皇と対立すると、光厳上皇の後醍醐追討の院宣を取り次ぎ、南北朝対立の発端となる。

日野資朝（俊光の次男）

次男の資朝は、元亨二年（1324）に発覚した後醍醐天皇の武力倒幕計画（正中の変）に参画し、父・俊光が持明院統の重臣であったにも拘らず、敢えて大覚寺統の傍流となる後醍醐に仕えたために父から勘当される。

日野資明（俊光の四男）

資明は、柳原殿といわれた邸宅に住み、柳原を家名としたので柳原資明という。足利尊氏によつて光明天皇が擁立され、光厳上皇の院政が開始されると、権中納言に任じられ、以後北朝の有能な実務官僚として活躍した。延元二年／建武四年（1337）には権大納言に

昇任された。

賢俊（三宝院賢俊）

賢俊僧正は醍醐寺宝池院流賢助に師事して密教を学び、師・賢助の死に際してその後継者に指名される。南北朝の内乱では尊氏方につき、後醍醐天皇の信任を受けて、延元元年／建武三年（1336）二月、尊氏が九州に走ったとき、彼に従つて陣中の群議に当った。また持明院統の光厳上皇の院宣と錦旗を尊氏に伝える役割を果たし、足利將軍家と日野家とを結ぶ端緒をつくつた。参考資料・醍醐寺文化財アーカイブス（本稿末尾の25頁に引用）。同年六月、権大僧正に任じられ、醍醐寺座主となつて、二十二年間当職を占めた。尊氏及び北朝三代（光明・崇光・後光厳）の護持僧として権勢を振るう。

時光は日野家十九代を継ぐ、

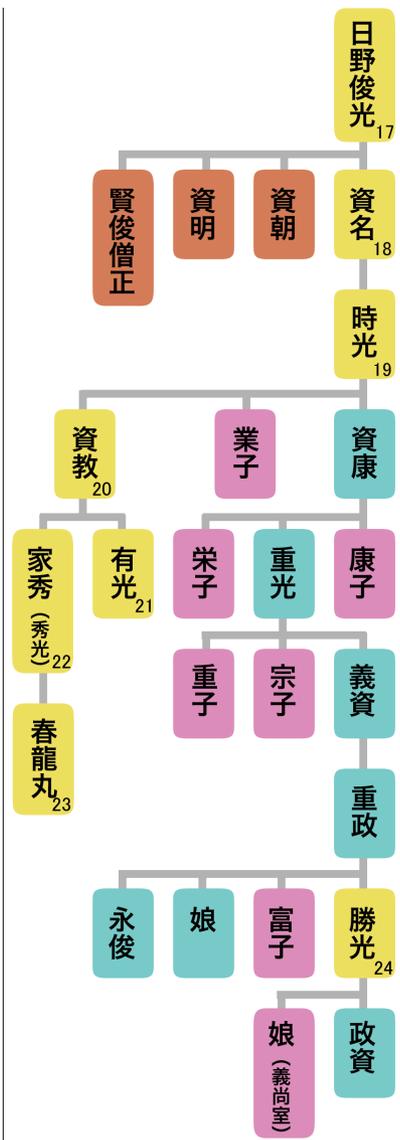
19代・日野時光（資名の嫡男）

時光は資名の嫡男として、嘉暦三年（1328）に生まれ、藏人頭を経て、正平十三年／延文三年（1358）に参議、右大弁、左大弁、越前権守、検非違使別当、権中納言、正三位、正平二十二年／貞治六年（1367）に権大納言となり、同年に没した。

時光の子として、嫡男の資康は分家し、娘の業子は將軍義満正室として嫁ぎ、次男の資

教は日野家の二十代を継いだ。三男、資国は、日野西家を創設、准大臣に次いで左大臣を贈られる。また娘二人は、左大臣・洞院公定および権大納言・甘露寺兼長に嫁ぐ。

日野家・裏松家の系図



裏松家

時光の子は裏松家へ

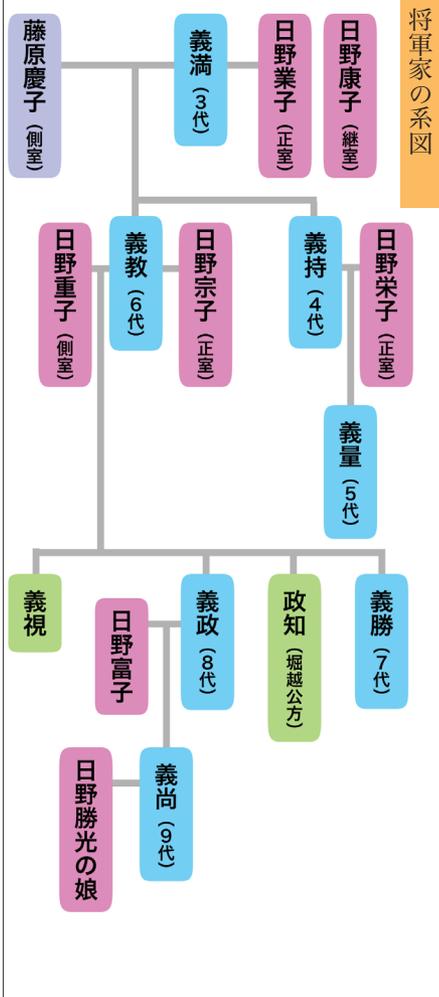
日野資康（時光の子）

資康は貞和四年／正平三年（1348）に生まれ、日野流の分家（裏松家）の当主となる。

裏松（日野）資康は、藏人頭、左大弁を経て、天授四年／永和四年（1378）に権中納言、天授七年（弘和元年）／康暦三年（永徳元年）（1381）、正三位、従二位、翌年に院執権、弘和三年／永徳三年（1383）より左衛門督、補檢非違使別当となる。正二位を経て、元中三年／至徳三年（1386）には権大納言、元中七年／康応二年（明徳元年）（1390）従一位、権大納言となるが、同年亡くなった。

日野業子は正平六年／観応二年（1351）に生まれ、宮中に影響力を持っていた叔母、従一位典侍の日野宣子の仲介で、文中四年（天授元年）／応安八年（永和元年）（1375）に足利義満と結婚する。なお、宣子は、花の御所の邸内に建てられた「岡松殿」（のちに尼門跡寺院の「大聖寺」となる）を、義満から与えられて住み、のちに「岡松一品」と呼ばれた。

結婚した義満は、業子と共に花の御所に移る。業子は和歌に秀で、義満の寵愛を受けたといわれる。義満の計らいで高い位階（従一位・准后となる）を与えられたが、応永十二年（1405）、五十五才で死去した。法名は定心院。



20代・日野資教（時光の次男）

資教は、延文元年／正平十一年（1366）に生まれ、二十代日野家当主となる。蔵人頭、参議を経て天授五年／永和五年（康暦元年）（1379）に従三位、檢非違使別当、右衛門督、翌年、左衛門督、翌々年には、権中納言、正三位に、さらに、従二位、正二位へと進み、

元中九年／明德三年（1392）より権大納言、応永十二年に従一位となる。応永三十五年／正長元年（1428）に亡くなる。

裏松家（分家）の創始は・・・

正平一統が破綻したあと、尊氏が擁立した後光厳天皇からも重用された日野流は、裏松・烏丸・日野西など多くの分家を創出する。裏松家と將軍家の縁故は深まり、業子と義満の婚礼によって、持明院統の公家としての日野流・裏松家は、政権に対しての影響力を強め、さらに日野資康の娘たち、康子は業子亡きあと、義満に、また栄子は四代將軍・義持に嫁ぐ。

義満は資康の娘・康子と再婚

応永十二年、正妻の業子に先立たれた義満は、資康の娘・康子（業子の姪に当る）と再婚する。

康子（日野／裏松資康の娘）

康子は、正平二十四年／応安二年（1369）の生まれで、義満の継室となって御台所の座を継ぐ。北山第南御所に住して、南御所と称される。

そのころ、後小松天皇が一代のうちに諒闇（天皇が、父母が亡くなったとき喪に服する期間。ろうあんとも読む）を二度経験することとなって、これが、過去の例では不吉だったこと

から、義満は、准母じゅんぼ（天皇の生母ではない女性が母に擬されること。またその女性の称号）を立てて諒闇を回避すべきだと主張した。そこで、関白・一条経嗣や重光ら側近たちは、將軍の意向に沿うために奔走した。康子を先ず後小松の准母としたのち、応永十四年（1407）には准三宮へ、さらに北山院の院号を宣下されて女院にょいん（「によういん」とも読み、三后へ太皇太后・皇太后・皇后▽や、それに準ずる身位（准后、内親王など）の女性に宣下された称号を指す）となった。

応永十五年（1408）に義満は亡くなると、跡を継いだ義持は実妹の夫だったが、父・義満の朝廷政策を批判し、康子と不仲だったといわれる『兼宣公記』（『兼宣公記』 公家広橋兼宣へ1366～1429）の日記や、1387～1428へ元中四年／嘉慶元年～正長元年▽の記事が含まれる。兼宣は後円融天皇の外戚にあたり、武家伝奏の役も務めたので、その時期の朝暮関係を知ることができ、史料として貴重なものとされている。

そのため、康子が応永二十六年に亡くなると、恐らく義持の意向によって、康子の葬儀は、女院としての格式では行われなかった。しかも、死後わずか一ヶ月ののち、康子の住んだ「南御所」は解体され、所領も後小松天皇に返還された。

日野／裏松重光（日野資康の子）

裏松（日野）資康の嫡子、重光は、応安七年（1374）の生まれで、父が分家したのち、格式をもった裏松家を継ぐ。型式的には同家の創始者とされている。蔵人頭を経て、明德五年（応永元年）に権中納言、応永三年（1396）、および同六年（1399）、さらに正二位となり、外戚がいせきとして権勢を振るう。同十一年（1404）から権大納言となる。従一位を経て、同十八年より大納言、院執権を務め、応永二十年（1413）に逝去したが、將軍・義勝、義政兄弟の祖父として、死後の文安二年（1445）に左大臣を追贈された。

子に義資よむすけ、宗子（足利義教御台所）、重子（足利義教側室）らがいる。

栄子（日野／裏松資康の娘）

康子の妹の栄子えいし（えいこ、とも読む）は、明德元年／元中七年（1390）の生まれ、四代將軍・義持の正室として嫁ぐ。応永十四年（1407）に義量（五代將軍となる）を生み、生母となる。義持との夫婦仲は良好で、義持が奈良や伊勢参詣に赴く際には同伴した。神仏への信仰心が深く、伊勢神宮や熊野詣に何度も出掛ける。義持の趣味だった田楽を好み、義持の晩年には大方殿と呼ばれた。子の義量は五代將軍を継いだ、応永三十二年（1425）に十九才で早世し、つづいて將軍・義持も応永三十五年（1428）、四十三才で死去する。栄子は、

常徳院海門和尚を戒師として落髪し、慈受院と号した。従一位に叙せられる。永享三年（1431）に死去した（享年四十二才）。

日野／裏松義資（裏松重光の三男）

義資は、応永四年（1397）に重光の三男として生まれた。応永十四年（1407）、北山第で、義満が烏帽子親となって元服が行なわれ、義満は偏諱として「義」の字を与えた。義資が義満の正室（日野康子）の甥だったことにもよるが、武家で「義」の字を与えられていたのは斯波氏のみであり、公家に対しては撰閥家の当主でさえ「満」の字しか与えられておらず、破格の厚遇だった。

義資は藏人頭、左中弁を経て、応永二十六年（1419）に左大弁、左衛門督、さらに権中納言となる。同三十一年（1424）に正三位、つづいて補院執権、武家伝奏を務めた。

応永三十五年一月（1428）、將軍・義持の死後、弟の青蓮院義円が後継者に選ばれると、青蓮院を退出した義円（のちに將軍・義教）の住まいとして自宅の裏松邸を提供した。また、義持の未亡人の栄子と協議して、妹の宗子を義教の正室とした。しかし、義教が本格的に政権を始動させると、義資は、かつて不忠があつたとして所領を没収され、蟄居を命じられた。また宗子は義教と不仲となり、永享三年（1431）に離縁されて、その後、もう一人

の妹重子が義教の側室となった。

義資は殺害される・・・

重子が義教の跡を継ぐはずの千也茶丸を産んだ時、蟄居していた義資の屋敷に人々が祝いに訪れたが、義教はこれに激怒し、祝いに訪れた全員を処罰するという拳に出る。そして永享六年（1434）、自邸で就寝中の義資は、侵入した何者かに殺害され、首を持ち去られた。犯人は捕まらず、義教の指示であるという噂が流れていた。家督を継いだ嫡男の重政も所領を没収されて出家したので、裏松家はまだ幼い、重政の子の勝光を残して断絶の危機に瀕することになった。

永享六年（1434）に亡くなった義資は、死後の宝徳二年（1450）に大納言を贈与される。前述したように、將軍・義持の死後、正室だった日野栄子は、甥の義資（重光嫡男）と図つて妹の宗子（生年不詳）を次の將軍職を継ぐことになった義持の弟に正室として嫁がせた。弟の義円は還俗して將軍となったが、僧侶だったので妻帯しておらず、直ちに正室を立てる必要が生じたのである。

宗子（裏松重光の娘）

將軍となった義教の還俗から一ヶ月も経たない応永三十五年（1428）閏三月、宗子は正

式に御台所に定められる。そのとき重子は「不受の気色（不同意、同意しない）」を示したが、栄子が重子を説得して嫁がせたという。

同年（改元されて正長元年）六月に婚儀が執り行なわれ、翌年の永享元年（1429）三月には女子を出産し、さらに翌年一月には三品に叙せられた。

ところが、この婚姻そのものが義教の後見人だった日野栄子によって決められたもので、その夫婦仲は良くならなかった。義教は次第に側室の尹子（正親町三条公雅の娘）に心を移していく。そして永享三年（1431）に、義教は突如として尹子に御台所の身分を与えることを宣言する。以後、宗子は「本台所」、尹子は「新台所」と呼ばれ、正室が二人いる状態となった。さらに二人の間の娘が死去し、続いて日野栄子も病死した。これを機に義教は宗子との離別を決意して、同年中に宗子は離別を言い渡されて御所を去る。

日野家に対しては宗子の妹となる日野重子（後の義勝・義政の生母）を側室に迎えることとなって代償した。その後の動向は不詳だが、文安四年に、宗子は出家して観智院と名乗り、死去したことが『康富記』に記されている。

『康富記』は、外記局官人を勤めた中原康富の日記で、記述は1408年（応永15年）から1455年（康正元年）に及ぶが、永享年間の記述などが欠落している。また一部は、父・

中原英隆が書いたものと考えられている。幕府を始め、武家の動向や、隼人司、主水司、大炊寮の各々の所領の経営について細かく記述され、和歌、連歌、猿楽など文化、芸能に関する記述も豊富で、このころの社会、有職故実を研究する上で貴重な史料となっている。

重子（裏松重光の娘）

重子は、応永十八年（1411）の生まれ、六代将軍・義教の側室となり、永享六年（1434）に義勝（のちに七代将軍となる）、同八年（1436）には義政（のちに八代将軍）を産む。

嘉吉の乱で夫・義教が殺害された後、幼年の義勝や義政を補佐して幕政に関与したが、義政の寵愛を受けた乳母今参局と対立した。今参局は、義政の正室となった富子（兄・義資の孫に当たる）の産んだ子が早世したのは、彼女の呪詛のためとされ、流刑となって、長祿三年（1459）には自害させられたが、これは富子の指示とも重子の指示とも言われる。

寛正四年（1463）に死去する。

日野（裏松）義資の長男として

日野／裏松重政（裏松義資の長男）

義資の長男として生まれた重政（生年不詳）は、裏松家の当主として、当初は政光と名乗っていた。位は蔵人右少弁・贈従二位内大臣。

父・義資が六代将軍・義教に蟄居を命じられて家督を継ぐ。永享六年(1434)に父・義資が将軍・義教に暗殺されたため出家し、所領は没収された。

叔母の重子の計らいで嫡男の勝光が家督を継ぎ、のち、還俗して重政と名乗り、娘・富子を儲けた。他に娘と息子の永俊(十一代将軍・義澄の義父)が知られている。娘の富子は八代将軍・義政室に、またもう一人の娘は足利義視室となる。

嘉吉三年(1443)に死去、法名は壺尊。

嫡男の勝光は……

永享元年(1429)、重政を父、北小路苗子を母として生まれ、裏松家の当主となる。すでに述べたように、永享六年(1434)に祖父の義資が何者かに暗殺され、父・政光(のち重政と名乗る)も所領を没収されて出家したため、勝光は六歳で祖父の跡を継いで家督を相続した。嘉吉元年(1441)には元服する。翌年、嘉吉二年、七代将軍となった足利千也茶丸(義政の兄)が元服して「義勝」と名乗ったので、この一字を受けて勝光と名乗る。

後述するように、日野家二十代・資教の系統が絶えたので、分家が本家を引き継ぐ形で日野家二十四代の当主となる。

日野家二十一代当主は……

21代・日野有光

二十代資教の嫡男の有光が継ぎ、続いてその弟の家秀が二十二代を継いだ。しかし、前記したように、本家の日野家より、分家の一つだった「裏松家」一門が将軍家との絆を深めて力を得たため、本家としての「日野家」の威勢は衰えていた。

日野有光は、元中四年／嘉慶元年(1387)の生まれ、嘉吉三年九月二十七日(1443年10月30日)父は権大納言の日野資教、子に日野資親、号を祐光。足利義満の縁戚なので、その寵愛を受け、後に娘は称光天皇の妃となる。

有光は、応永二十一年(1414)に権中納言、同二十四年(1417)、院執権、さらに同二十八年には権大納言となるが、応永三十二年(1425)、院執権と権大納言の両方を辞し、出家して祐光と号す。

日野流は将軍に抑圧される

日野流の隆盛は、本分家を問わず、室町殿にとっては重荷となる側面をもっていたので、外戚の勢力拡大をよく思わない四代将軍・義持は、応永三十四年(1427)に、有光を室町殿より追放する(『看聞日記』)。

看聞日記は、伏見宮貞成親王（後崇光院〈1372～1456〉）の日記で、日記41巻と御幸記1巻、別記1巻、目録1巻から構成され、全44巻から成る。一部は散逸しているが、応永二十三年（1416）より文安五年（1448）まで33年間に渡る部分が現存する。「看聞日記」は貞成親王が自筆した原本の題名で、一般には『看聞御記』とも呼ばれる。

貞成親王は伏見宮3代で、後花園天皇の実父にあたる人物である。將軍足利義教時代の幕政や世相、貞成親王の身边などについて記されており、政治史だけでなく文化史においても注目される。

続いて称光天皇が男子を残さずに没して皇統が伏見宮系統に移ると、有光は政治的に不遇となる。

失意の有光は、南朝復興を目指す後南朝と結んで嘉吉三年（1413）、武装して禁裏に乱入し、三種の神器の一部を奪う（禁闕の変）。比叡山延暦寺の根本中堂に立て籠もったがやがて殺され、事件とは無関係であった有光の子で、右大弁、従三位の資親も殺害された。

日野家二十二代は家秀に

22代・日野家秀

先代の有光の弟で、応永八年（1401）に生まれた、初名・秀光が後継ぎとなる。蔵人頭、

参議、左大弁を経て、応永三十五年／正長元年（1428）、権中納言、さらに院執権、檢非違使別当、左衛門督、永享四年（1432）には権大納言となり、同年没した。

23代・日野春龍丸

二十三代を継いだのは、家秀の養子で、日野流・広橋家の春龍丸（父は権中納言の広橋兼郷）だった。しかし、春龍丸もその年のうちに死去したので、結局、日野家の家督と所領は兼郷に与えられ、兼郷は「日野中納言」を名乗り、二十代当主・資教から始まった系統は消滅した。

24代・日野勝光について

六代將軍義教は、嘉吉元年（1411）、赤松満祐によって殺害されたが、行き過ぎた彼の専制政治が一因なので、これを改めて元に回復しようとする動きが起った。その一環として日野家の再興を図ることになり、新しい日野家の当主として選ばれたのは、日野流に属する裏松家の当主、勝光だった。

勝光は「押大臣」と呼ばれた。妹の富子を八代將軍・義政の正室として嫁がせ、生まれた子、義尚の將軍（九代）職への就任に寄与する。勝光は義政・富子のもとで強大な政治的影響力を握り、本来名家の資格では昇進することのできない左大臣にまで昇り「押大臣」と称

された。子に政資^{まさすけ}、娘に（足利義尚室）がいる。

さらに娘を義尚の正室として嫁がせた。博覧強記で和漢学に通じ、和歌を読む。

その役職は・・・

文安三年（1446）、右少弁に任官、続いて藏人に補任、右少弁如元となり、文安五年（1448）、藏人右少弁如元、さらに宝徳二年（1450）、従四位下に昇叙、右中弁に転任し、藏人頭も兼帯する。従四位上に昇叙、藏人頭右中弁如元、右大弁に転任し、藏人頭如元、正四位下に昇叙し、藏人頭右大弁如元、参議に補任され、右大弁如元へ。翌年、従三位に昇叙し、参議右大弁如元、左大弁に遷任、参議如元、権中納言に転任される。

享徳元年（1452）、正三位に昇叙、権中納言如元へ、さらに康正元年（1455）、従二位に昇叙し、権大納言に転任される。長禄三年（1459）、正二位に昇叙し、権大納言如元となる。

寛正六年（1465）、従一位に昇叙し、権大納言如元。文正元年（1466）には院（後花園上皇）執事を兼帯し、翌年、内大臣に転任し、院執事を辞す。応仁二年（1468）に内大臣を辞任して、文明八年（1476）、左大臣任官するが、左大臣を辞任して没した。四十八才。法号は唯称院。法名は唯称院殿圓長久富大居士。

義政の室となった日野富子

永享十二年（1440）山城（現・京都府）の生まれ、父は藏人右少弁・贈内大臣日野重政、母は従三位北小路苗子（北小路禪尼）。康正元年（1455）、八代将軍・義政の正室となる。時に義政二十才、富子は十六才だった。

長禄三年（1459）には第一子が生まれたが、夭折する。義政の乳母の今参局が呪いを掛けたせいだとして、彼女は琵琶湖沖島に流罪とされ、途中で自刃、義政の側室四人も追放された。

富子は寛正三年（1462）と翌四年、相次いで女子を産んだ。その後も男子は産まれなかった。寛正五年（1464）、義政は実弟で仏門に入っていた義尋を還俗させ、名を足利義視と改めさせ、細川勝元を後見として将軍の後継者とした。

しかし翌寛正六年に、富子は義尚を出産して、富子は義尚の擁立を目論んだ。そのため、義尚の後見だった山名宗全や、実家の日野家は義視と対立する。これに幕府の実力者の勝元と宗全の対立や斯波氏、畠山氏の家督相続問題などが複雑に絡み合っ、て、応仁の乱は勃発した。

富子は経済的に力を得て、幕政と幕府の経済に寄与した

戦乱のため食料難となったとき、富子はお米の取引に参入し、投機によって巨万の富を稼ぎ、歳まで建てた、との記録もあり、戦いの全時期を通じて細川勝元を総大将とする東軍側にいたが、東西両軍の大名に多額の金銭を貸し付け、利息を徴収した、といわれている。『大乘院寺社雜事記』には、畠山氏の嫡男の義統に千貫文を貸した、との記述があるが、同書は興福寺大乘院で門跡を務めた尋尊らが三代にわたって記した日記で、約百九十冊。原本は宝徳二年（1450）から大永七年（1527）までを国立公文書館が所蔵する（重要文化財）。特に尋尊の書いた部分は、応仁の乱前後の根本史料とされている。

「京都七口関」が設置される

過ぐる長祿三年（1500）ころから、京の七口（京都につながる街道の出入）に関所が設置されて関銭を徴集していた（京都七口関）。この関所の設置は内裏の修復費、諸祭祀の費用だったが、富子はほとんどその資金を懐に入れたので、激高した民衆が文明十二年（1480）に関所を破壊した（徳政一揆）という。富子は財産を守るために弾圧に乗り出して、直ちに関の再設置に取り掛ったが、実際には、火災で焼けた御所を修復するために必要な費用を自身の蓄財から賄った、と伝える文書も残されている。

義政との間は冷却していた

文明三年（1471）ころ、室町亭（京都市上京区）に避難していた後土御門天皇との密通の噂が広まった。天皇が富子の侍女に手を付けたことによるものだが、そんな噂が流れるほど義政と富子の間は冷却化していた。

文明五年に宗全・勝元が死去し、義政が隠居、義尚が元服して九代将軍に就任すると、兄の日野勝光が新将軍代となった。義政は政治への興味を全く失ない、文明七年（1475）に、小河御所（現・上京区堀川）を建設して一人で移った。

文明八年、勝光が没すると、富子は実質的な幕府の指導者となつて、「御台二天御計い」するといわれた富子に、八朔（八月朔日＝旧暦の一日に、感謝の贈物をする風習）の進物を届ける人々の行列は一、二町にも達したといわれる。

室町亭が焼失して、義政が住む小河御所へ移ったが、文明十三年（1481）、義政は長谷聖護院の山荘に移ってしまい、その後、義政とは別居した。

文明九年（1477）、西軍は引き上げたので、京都の戦乱は終止符を打ったが、その翌日、



足利義尚像（天龍寺蔵）
出典：ウィキペディア（宇治圭水）

富子は伝奏広橋兼頭に「土御門内裏が炎上しなかつたのは、西軍の大内政弘と申し合わせ
ていたから」という趣旨の発言をしている。

富子は学問にも熱心だった・・・

富子は、関白の一条兼良に源氏物語の講義を受けたという。將軍家御台所とはいえ、関
白が女性に講義をするのは異例であるが、富子はこのために莫大な献金を行った、といわ
れる。民衆だけでなく公家の怨嗟の的となった金儲けの「悪女」と断定することは、行き
過ぎかもしれない。

歌会で詠んだ歌は・・・

文明九年七月、朝廷が開いた天皇主宰の「七夕歌会」（お題は「山家雨」）に出席した富
子が詠んだのは

さびしかれと

世をのがれこし

柴の庵に

なを袖ぬらす

夕暮れの雨

幕府を立て直すために寂しさに堪える富子の心情が表われている。

あやしとや

なおも涙を人のみむ

無名に朽ちる

袖としらすは

また富子は京都の祭、御蔭祭（みかげ葵祭の前に行われる）の復活に貢献したといわれている。

応仁の乱後には・・・

義尚は成長すると富子を疎んじ始め、文明十五年（1488）には富子をおいて伊勢貞宗邸
に移転し、酒色に溺れた。そのため富子は一時権力を失ったが、延徳元年（1489）に、六

角高頼討伐（長享・延徳の乱）で遠征中の義尚が、二十五才という若さで没した。

富子は、息子の急死によって意気消沈したが、義視と自分の妹の間に生まれた足利義材（のちに改名して義尹、さらに義植）を將軍に擁立することを義政と協議して、合意に達した。延徳二年（1490）正月に義政が没すると、義材は十代將軍となる。しかし後見人となった義視は、権力を持ち続ける富子と争って、富子の邸宅の小河邸を破壊し、領地を差し押さえた。翌年の義視の死後、親政を開始した義材もまた富子と敵対した。

明応二年（1493）、義材が河内に出征している間に、富子は細川政元と共にクーデターを起こして義材を廃し、義政の甥で堀越公方、足利政知の子、足利義澄を十一代將軍に就任させた（明応の政変）。その三年後の明応五年（1496）、五十七才で死亡した。

裏松・日野家と將軍家との絆は

室町幕府三代將軍足利義満の正室だった業子（日野家）と康子（裏松家）以来、室町殿の正室は日野流、特に裏松家から出すことが例となり、四代將軍・義持の正室の栄子、六代將軍・義教の正室の宗子、八代將軍・義政の正室の富子に続いて、九代將軍・義尚の正室（勝光の娘で実名不詳）、十一代義澄の正室（実名不詳）と六代にわたって將軍の正室を

輩出した。義政の継嗣に擬せられた義視の正室も勝光と富子の妹（実名不詳）だった。

勝光死後の日野家は・・・

勝光亡き後は子息の政資が継いだが早世する。政資の跡を徳大寺実淳の次男高光（のち澄光、内光と改名）が継いだが、桂川原の戦いで戦死した。家運は傾き、さらに内光の子息・晴光の嗣子だった晴資も、下向していた駿河で父に先立って早世する。その後、晴光の死によって日野家は、まともや断絶する。しかし、

春日局の尽力で・・・

晴光の未亡人で、晴資の母だった春日局は、十三代將軍・義輝の乳人として、幕府に対しての政治的な影響力をもっていた。そこで春日局の尽力と義輝の庇護により日野家の経営は維持される。義輝は春日局の守る日野家に、同じ日野流の広橋家から養子輝資を迎えて日野家を継承させ、成人した輝資は榮進して権大納言にいたった。

付録

醍醐寺「文化財アーカイブス」より

以下、藤井雅子氏（日本女子大准教授、醍醐寺霊宝館学芸員）の解説文から

足利尊氏と三宝院賢俊

足利尊氏と賢俊とを深く結びつけたのは、建武三年（1336）二月尊氏が九州に敗走する途中、賢俊が「勅使」として北朝の光厳上皇の院宣をもたらし「朝敵」となることを免れたことによるという（「梅松論」）。当時、尊氏は南朝の後醍醐天皇と対立して戦っていたので、後醍醐への叛旗を正当化するために北朝の承認を欲していた。その証となる院宣の到来は、尊氏の政治・軍事上の立場に重要な転機となったのだが、では何故、賢俊が尊氏のもとに院宣を持参したのだろうか。

賢俊〔正安元年（1299）〜延文二年（1357）〕は、持明院統（後の北朝）に仕えた日野俊光の息子として生まれ、その兄弟に、北朝に与した資名・資明、南朝に味方した資朝とが

いた。思うに、尊氏は北朝の院宣を得ようとして、資明の代わりに、その兄弟で僧侶だった賢俊に「勅使」の役割を回したのであろう。

観応二年（1351）正月、尊氏は弟直義と対立し京都を追われたが、この時、賢俊は尊氏の軍勢に従うことを決意した（史料…「賢俊書状」）。



賢俊像 一幅

將軍（しょうぐん）同道（どうどう）申し候（まう）の間（まひら）、進退（しんたい）偏（ひとへ）に彼命（かのめい）に任せ候（まかせまう）いおわんぬ、よつて戰場（せんじょう）に共奉（ぐぶ）の条（じょう）、尺門（しゃくもん）の儀（ぎ）に非（あら）ず、一流（いちりゅう）の恥辱（ちじよく）たるべきの条（じょう）、冥頭（みやうず）に就（つ）き歎（なげ）き存（ぞん）じ候（まう）う心中（しんちゆう）に候（まう）、察（さ）せられ給（たま）ふべく候（まう）、但（ただ）し時宜（じぎ）無力（むりよく）の次第（しだい）に候（まう）なり、旅店（りよてん）において不慮（ふりよ）の事候（こと）はば、世上（せじょう）静謐（せいひつ）の時（とき）、面々（めんめん）談合（だんごう）に及び、師跡（しせき）を興（おこ）さるべく候（まう）なり、

大意

「將軍尊氏にご同道申し上げることにしたので、自分の運命は偏に尊氏のご命令に任せることにしました。よつて戰場にお供することは、僧侶の身としてあつてはならないことであり、（賢俊の列した三宝院流である）法流にとつて恥ずべきものですが、神仏のお導

きであるので、嘆くばかりの心中を察していただきたい。ただし今の状況は自分の力ではどうしようもない事です。旅先において私にもしものことがありましたならば、世の中が静まり治まった時に、関係の者たちと相談して、先師たちの遺したもの（院家・法流・所領等）を（今後も）ますます発展させるようにしてください。」

賢俊はこの書状を弟子の光済に宛ててしたためた。この中で賢俊は僧侶の身で従軍することを恥じているが、これまで尊氏から受けた恩情を考慮すると、従軍は避けられないことと諦めているようだ。

このように賢俊が尊氏に対して強く忠誠を誓った理由は、賢俊が寺内外において獲得した立場が尊氏の後見に基づいていたためと考えられる。鎌倉後期から南北朝期における醍

醐寺は、大覚寺統（後の南朝）の影響を強く受けており、後醍醐天皇の寵臣であった文観弘真が勢力を持っていた。それに対して賢俊の先師たちは、法流や院家という由緒はあるものの、対抗できる切り札を持っていなかった。そうした中で尊氏と賢俊との関わりが生まれて、賢俊は醍醐寺座主に補任された。寺内の有力院家を「管領」（管理支配）するよう尊氏から認められ、寺内を統括する立場を強めていった。また寺外においても真言宗の長官である東寺長者、足利氏（源氏）の氏社である六条八幡宮や篠村八幡宮の別当にも任じられ、尊氏や武家護持のために積極的に祈禱を行った。

さらに幕政にも関与したが、当時北朝の公卿つた洞院公賢は賢俊について、「彼の僧正公家・武家の媒介、すこぶる軽忽といへども、毎

時彼をもつて指南となし、仰せ通さるるなり（彼の僧正は公家武家の間のなかだちを果たし、非常に軽はずみで愚かではあるが、すべての事柄は彼の指図によって將軍らに仰せ通されるのである）」、「栄耀至極、公家武家権勢比肩の人なし、なかんづく諸人の蠹害、大略彼の、（マン）のために生涯を失うの輩あるの由、風聞あり（栄え世をときめくこと甚だしく、公家武家の



足利尊氏御判御教書 一通 (国宝)

賢俊書状 一通 (国宝)

者で彼に匹敵するような立場の者はいない、中でも諸人にとつて害をなす者であり、彼のために地位を失った者が多いという「うわさがある」と評した。

この記述から、如何に賢俊が尊氏に重用されたかをうかがうことができるとともに、賢俊の発言力の大きさを敵視し、憂慮する風潮があったことがわかる。

しかしながら賢俊の尊氏に対する強い思いは本物だったに違いない。このことは、尊氏の「慎蔵」、すなわち厄年に当たる延文二年(1357)の出来事から知ることができ

る。この年の二月、賢俊は石清水八幡宮の宝前に願文を捧げ、尊氏から「多年の芳契」「数箇の重恩」を受け、それらに「酬」いるために、賢俊の「少量の身」をもって、「大樹(將軍尊氏)の命」を「祈り代える」ことを立願した。つまり尊氏の厄を賢俊が代わりに受けることを求めたの

である。この賢俊の願いが聞き入れられたのか、この年尊氏は無事に過ごすことができたが、賢俊は閏七月十六日に入滅した。

賢俊の四十九日仏事に、尊氏は自ら筆を取って般若理趣経を書写し供えたが、それが今も醍醐寺に残されている。尊氏の達筆とはいえないながらも一字一字丁寧に書かれた文字に、尊氏の賢俊への深い情が伝わってくるように思われる。

般若理趣経

正式には「大乗金剛不空真実三摩耶経」(二巻)で真言宗の読誦經典。万物の本体が清浄であることを明らかにし、即身成仏の教義を説く。下図は、足利尊氏筆の一片

紙本墨書(楮紙) 縦23.5糎 横9.5糎 (国宝、醍醐寺所蔵)



「市民フォーラム」は・・・

地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

市民フォーラムは地域情報紙「市民プレス」を編集・発行し、無料で配布します。

読者の「オピニオン」（意見・感想）をお寄せ下さい。

編集部 原宛にどうぞ

TEL 090 (3048) 5502

本紙「市民プレス」は年四回（一、四、七、十月、各五日）発行